

成熟しつつあるナラ林からどのくらい用材が生産できるのか？

長野県林業総合センター 指導部 小山 泰弘
北アルプス地域振興局 林務課 普及林産係 間島 達哉
諏訪地域振興局 林務課 普及林産係 峰村 政輝

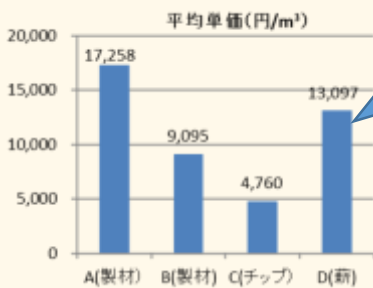
県内には、広葉樹のA材生産が可能な末口径24cm以上が得られるナラ林が増えてきました。しかし、こうしたナラ林を皆伐したとして、どのような売れ行きが見込めるのかはわかりません。広葉樹資源が多い北アルプス地域と、広葉樹の多い下諏訪県有林のナラが優占する林分で皆伐を行い、どの程度の広葉樹が用材として利用できるのかを確認しました。

残念ながら、立っているときには直材が取れると見込んだ材であっても、横にしてみると曲がりがよくわかり、用材として売れないものが大半でした。結果、生産材積に対するA B材と呼ばれる用材の生産材積は、概ね幹材積の10%程度にとどまり、歩留まりが高いとは言えませんでした。

大町市北山団地



コナラとミズナラが優占する76年生の広葉樹林0.46haを地元事業体が皆伐。
チェーンソーで伐倒し、ウインチ付きグラブソーで集材、造材したのちフォワーダで搬出。

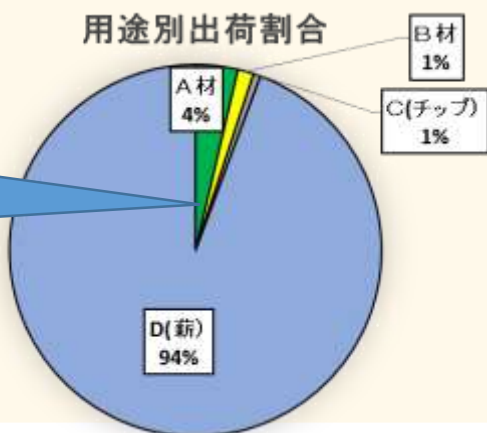


B材で出荷するよりも薪は単価が良いので、A材が見込めるもの以外は薪で販売。

A材と予測し、市場に出荷したうちの1/3は、B材、C材として扱われて、単価が下がった。

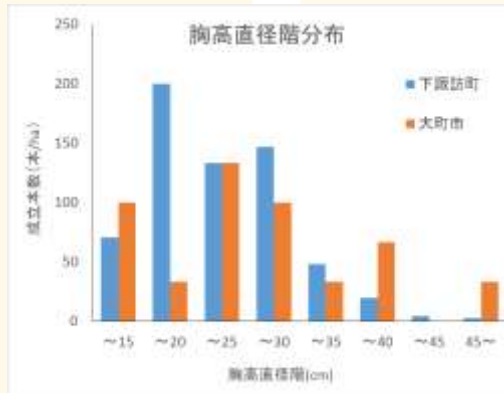
出荷量の94%は薪で売れた

用途別出荷割合



調査地の概要

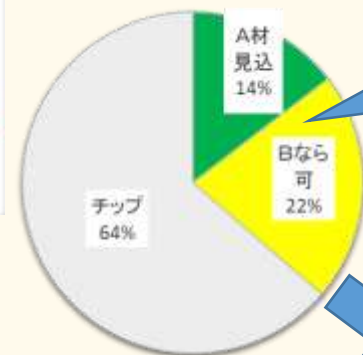
大町市北山団地	皆伐前の状況	下諏訪県有林
500	成立本数(本/ha)	626
27.5	平均直径(cm)	27.5
21.0	上層平均樹高(m)	18.1



下諏訪県有林



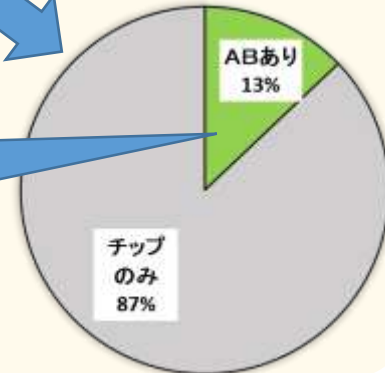
ミズナラが優占する71年生の広葉樹林2.4haを地元事業体が立木買取で皆伐。
チェーンソーで伐倒し、ウインチ付きグラブソーで集材、造材したのちトラックで搬出。



全個体の立木を測定し、材の様子を見ながら、林業普及指導員の合議で用材生産可能材積を推定。

結果

皆伐作業中の3日間に出荷した材積のうち、用材として出荷することができた材積の割合



なぜ？ そうなった

大町市では、燃料材としての価格がある程度見込めたことからA材になると見込まれる材を除いて、燃料用として出荷した。しかし、A材として市場へ出荷した材の1/3がB材またはC材として引き取られてしまい、用材の材積率はさらに少なかった。

下諏訪県有林では、事前調査の材積見込みを大きく下回る13%の材しか用材として出荷できなかった。用材として出荷した材の中には燃料材としてしか引き取られなかったものもあるため、最終的な生産材積はさらに低かった。

立木の状態



倒した状態



採材確認



検尺



造材割合



立木の状態でまっすぐに見えても、水平に倒してみると、どこかが曲がっていて、2.1mの直材はほとんど取れなかった。用材生産を行うためには、丁寧な検尺は不可欠であるが、市場の判断と山側の判断基準も誤差があり、広葉樹の用材歩留まりはかなり低い。